

2022 年横浜ナザレン教会・三位一体後第十三主日 (9/11) 礼拝

「主の弟子として」

使徒言行録第七章 17 節から 34 節

【聖書】

使徒言行録 7:17 神がアブラハムになさった約束の実現する時が近づくにつれ、民は増え、エジプト中に広がりました。18 それは、ヨセフのことを知らない別の王が、エジプトの支配者となるまでのことでした。19 この王は、わたしたちの同胞を欺き、先祖を虐待して乳飲み子を捨てさせ、生かしておかないようにしました。20 このときに、モーセが生まれたのです。神の目に適った美しい子で、三か月の間、父の家で育てられ、21 その後、捨てられたのをファラオの王女が拾い上げ、自分の子として育てたのです。22 そして、モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、すばらしい話や行いをする者になりました。

23 四十歳になったとき、モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思い立ちました。24 それで、彼らの一人が虐待されているのを見て助け、相手のエジプト人を打ち殺し、ひどい目に遭っていた人のあだを討ったのです。25 モーセは、自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれると思いました。しかし、理解してくれませんでした。26 次の日、モーセはイスラエル人が互いに争っているところに来合わせたので、仲直りをさせようとして言いました。『君たち、兄弟どうしではないか。なぜ、傷つけ合うのだ。』27 すると、仲間を痛めつけていた男は、モーセを突き飛ばして言いました。『だが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。28 きのうエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか。』

29 モーセはこの言葉を聞いて、逃げ出し、そして、ミディアン地方に身を寄せている間に、二人の男の子をもうけました。30 四十年たったとき、シナイ山に近い荒れ野において、柴の燃える炎の中で、天使がモーセの前に現れました。31 モーセは、この光景を見て驚きました。もっとよく見ようとして近づくと、主の声が聞こえました。32『わたしは、あなたの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である』と。モーセは恐れおののいて、それ以上見ようとはしませんでした。33 そのとき、主はこう仰せになりました。『履物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる土地である。34 わたしは、エジプトにいるわたしの民の不幸を確かに見届け、また、その嘆きを聞いたので、彼らを救うために降って来た。さあ、今あなたをエジプトに遣わそう。』

1 ステファノの説教が言いたいこと

ステファノの最高法院での説教を見えています。ステファノは、アブラハムやヨセフについての倍以上の長さで、出エジプトについて語っています。彼が、出エジプトの出来事を特に強調したいのは、明らかです。何故なら、聖書の神とイスラエルの民との関係を決定的なもの

にしたのが、エジプト帝国での絶滅の危機からの救いだっただけです。この強烈な記憶は代々受け継がれ、民族のアイデンティティとなりました。私たちキリスト者や教会にとって、主イエス・キリストの十字架と復活が決定的であり、この出来事を繰り返し語り思い起し、心と体に刻んで私たちの命の基本であり中核となっていくように、ユダヤの人々にとって、出エジプトの救いの出来事は、彼らの信仰の基本であり中核なのです。今日は、ステファノが語る出エジプトの出来事の前半部分から、神の救いについて聴いていきたいと思います。

2 モーセ誕生直前夜

ステファノは、ヨセフからモーセ誕生直前までを17節から19節で語ります。17節の「約束」は、6、7節の「神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる』『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する』」なる神の言葉です。ヨセフが宰相として仕えた時代のエジプトを支配していたのは、エジプト人の王朝ではなく、外国人がエジプトを征服して建てた王朝だったようです。ですから、外国人であったヨセフを宰相として抜擢され重用したのでしょう。しかし、この征服王朝はやがて衰退し、エジプト人の王朝にとって代わられます。よそ者の征服王朝に支配された苦い経験を持つエジプト人のファラオは、外国人に厳しく対応したようです。一方、ヤコブの代にエジプトに移住したイスラエル民族は、百人に満たない小さな家族でしたが、神の祝福を受けてエジプト中に広がって行きました。数を増すイスラエル、しかもエジプト人と生活習慣の全く異なる外国人であるイスラエル、エジプト人が憎むには恰好の相手でした。

イスラエルの人びとは、飢饉の為に外国であるエジプトに身を寄せた、いわば難民です。出エジプトの背景となる古代世界の難民事情と、現代世界の難民問題には通じるものがあります。様々な事情で故郷を出て他国に身を寄せる人々は、その国の政治状況に翻弄されます。どんなにその国に尽くしてもしよせんよそ者、差別され続け、あらゆる疑いを抱かれ迫害されるのも度々。日本でも、戦争中に労働力として連行してきた朝鮮半島や中国大陸出身の人々とその子孫に対する差別は、ずっと続いていますし、災害などの緊急時には虐殺事件など迫害も起こっています。日本人だけがことさら悪いのではなく、人間はみな同じような事をしてしまう存在なのだ、と私は思います。

しかし、イスラエルを守る神は、そのようなエジプト人の迫害を跳ね返してくださり、イスラエルの人々の数はますます増えた、と出エジプト記は語ります。業を煮やしたエジプトのファラオは「乳飲み子を捨てさせ、生かしておかないようにしました。」という民族絶滅政策を打ち出します。乳飲み子を捨てさせ野垂れ死にさせるなんて、吐き気を覚えます。が、これは遠い古代世界の出来事ではなく、私たちが生きている現代世界でも似たような事が繰り返されています。私自身振り返ってもそうです。食べるのが大好きな私はつい食べ過ぎてしまう、その時、世界中で飢えている人々の事は忘れてしまいます。私達は、自分達に関係

なければ、最も弱い人たちが強いられる犠牲に本当に鈍感、何より自分自身を振り返って痛感します。聖書は、イスラエルを迫害するエジプト人の姿を描くことで、自分達を神々とする権力者達は、どこまでも残虐になれるし、一般の人びとも、自分達に直接被害が及ばなければ、どこまでも無関心に冷酷になれる、人の罪の現実を読者に鋭く突き付けているように思います。

3 モーセ誕生、皇室で育てられる

さて、ステファノは、そんなイスラエル民族絶体絶命の時に、モーセが生まれた、と語ります。赤ん坊モーセは「**神の目に適った美しい子**」でした。勿論、ファラオはじめイスラエルの人々も、モーセの両親でさえ、神の救いの計画が動き出した事に気づきません。神の救いの出来事は、誰一人気づかぬ間にひそやかに動き出します。モーセは生まれて三か月目、ナイル川に捨てられますが、水浴びをしていたファラオの王女に助けられ、彼女の子供、王子としてエジプト王室で育てられます。ステファノは、「**モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、素晴らしい話や行いをする者になりました。**」と語りました。エジプトで奴隷として酷使されていたイスラエルの人々を、神がアブラハムに約束した土地に戻すには、エジプトと正面切って戦うわけにはいきません。武力において、エジプト帝国にかなうわけではないのですから。平和のうちに出て行くしかないのですが、その為には優れた交渉術が必要です。イスラエルは羊を飼う民族であり、文化的にはエジプト帝国に到底かなうものではありませんし外交術などもなかったでしょう。イスラエルの国家がまだ成立していないのですから。だから神はモーセをエジプト王室で成長させ、古代世界でも超一流の教育を受けさせたのだと思います。神の計画のなんと行き届いたことでしょうか、

そして、この事は、聖書の神がこの世界を支配される大きなお方だ、と私達に語りかけます。主イエス・キリストの出来事のあとに生きている私達は、この事に何の驚きも持たないかもしれません。が、古代世界では違います。古代では、国ごとに「神々」がいました。国あってこそその神々、国が滅びれば神々も滅びていたのです。人間が造った神々であったことが分かります。そんな中、弱小民族、イスラエルをご自身の宝の民とされた聖書の御神は、国を超えるまことの「神」。人間が引いた国境など関係ありません。ヨセフを西のエジプトに送り、ヤコブ一族も避難させ、後にモーセを東のミディアン地方へと逃がします。私達人間が自分達に都合のよいうように、天の御神を自分達的手中に閉じ込める事など出来ない、神は神であり、人間を超えて広く大きい方であり、最も自由なお方である、と旧約の物語はわたし達に教えてくれます。

4 モーセの挫折とその意味

神の救いの出来事の為に選ばれたモーセ。しかし、神の出来事であるがゆえに一筋縄

ではいきません。彼が大きな挫折をしたことを、ステファノは23節から28節語ります。その時、モーセは40歳であったそうですが、とっさにエジプト人を殺すような場当たりの行動は、40という年齢にしては幼く、ちぐはぐのように思えます。ですが、この40歳をそのまま実年齢と受け取る必要はありません。聖書に「四十」という数字がある時、「一つの時代」という意味がある場合が多いようで、今日の箇所もそうです。「四十歳」は、モーセの人生に大きな転機がやって来た、その転機は神がもたらされたもの、とステファノは語っているのです。しかし、それは大きな挫折でもありました。彼は、仲間を迫害から救うためにエジプト人を殺した自分をイスラエルの人々は指導者として認めてくれるだろう、おめでたくも思っていました。しかし、実際にはそうではありませんでした。仲間から、「**誰がお前を我々の指導者や裁判官にしたのか**」と拒絶されます。この時のモーセは、この問いに対して「**私をあなた方の指導者、裁判官としたのは、神です**」と答えるだけの確信を持っていませんでした。彼は自分の思いでエジプト人を殺しました。そして、ファラオのお尋ね者となり、仲間からも拒絶されたモーセには、エジプト帝国に居場所はありません、砂漠へ荒野へと逃亡します。やがてシナイ半島の東側、ミディアン地方にたどり着いた彼は、その地の祭司エトロー家と出会い、娘のツィッポラと結婚して二人の息子をもうけて、羊飼いと生活します。歳月は流れさり、四十年、つまり更に一つの時代が満ちた時、シナイ山で神はモーセの前に現れ、ご自身が、イスラエルの救いの為に彼をエジプトへと遣わすことをはっきりと告げます。いよいよイスラエル民族のエジプト脱出の物語が動き出します。

それにしても、モーセ物語は不思議です。彼はイスラエルの人々を救うために神が準備された人物で、その為にエジプト王室で育てられたのです。そんなモーセが、「**仲間を助けようと思いついた時**」に神は、モーセに「**さあ、今、私があなたを遣わす**」と仰らなかったのでしょうか。どうして、モーセが軽はずみにエジプト人を殺し、ミディアン地方まで逃げて、そこで羊を飼うままとさせておいたのでしょうか。

それは、モーセにイスラエルの人々と同じ生活を経験させるためではなかったか、と思います。イスラエルは、アブラハムの頃から羊を飼って生きてきました。神は、その民の生活を実際にモーセに経験させることで、彼を徹底的にイスラエルの民の一人としたのです。そして、イスラエルの人々の指導者として十二分に整えたのだと思います。四十年は決して短い年月ではありません。ですが、モーセを根っからの羊飼いとつくりかえるには、短い年月では足りなかったのでしょうか。人を全体的に造り変えるには、それなりの時が必要です。神はそこまでして、モーセをイスラエルの人々の指導者とされました。天の御神がイスラエルを救おうとされている本気を感じます。イスラエルのエジプト脱出は困難を極める大事業。その難しい事業を導くリーダー、指導者には、様々な条件が求められるでしょう。広い知識、豊富な経験に裏打ちされた現実的な知恵、勇気、判断力、先を見通す力、強い指導力などなど。しかし、それらの諸条件にまして、最も必要な条件があります。一体何か？

それは、自分が導く人々を、大切に思うこと、愛することではないでしょうか。愛せない相手を、救いへと導くことは、できません。そして、愛は、先ず相手を知る事から始まるのです。

相手と同じ立場に立つ事から始まります。神が、モーセをエジプトから追放しミディアン地方で羊を飼う者とした、そしてその後に彼を召したのは、モーセが真実にイスラエルの人びと同じになり、彼らを理解し愛する事ができるためであったのではないのでしょうか。モーセのミディアン逃亡は、その為の大きな挫折でした。そして実際、モーセは、出エジプトを導く中、数々の試練を受けますが、その中であって、イスラエルの人々を愛し抜く指導者として成長していきます。イスラエルの人びとがモーセに従順であったからではありません。ステファノもこの後に述べていますが、人々は幾度となく、神とモーセに逆らいました。しかし、モーセは、イスラエルの人々を神に執り成し続けました。イスラエルの人々が神を決定的に裏切った時、神は「この民を滅す」とモーセに伝えます。すると、モーセは「この私を先に滅ぼしてください」と神に詰め寄り、不誠実な民を神にとりなした、とまで聖書は記します。

5 主イエス・キリスト

ここまでを見て来て、モーセの一生が誰を指さしているか、あきらかでしょう。神の独り子イエス・キリストを指さしているのです。神の独り子であり、子なる御神でもあるイエス・キリストは、この地上に人となってくださった。罪を犯さない、という一点を除いて、私たちと全く同じになってくださったのです。それも権力者ではなく、弱く小さい庶民として生まれ、成長してくださったのです。貧しい生活を送り、生きる苦しみも楽しみも経験されたでしょう。疲れを覚えて、サマリア人の女み水を求めたこともあるように、肉体の弱さも負ってくださった。弟子達の事で喜びの声をあげたことも、友の為に悲しみの涙を流されたこともあります。自分勝手に神を利用する人々に対して怒り、鋭い叱責の声を上げられたこともあります。神の独り子という自身の在り方を変えて、まことの人間となり、まことの人間として人々を愛し抜いた方。十字架の上の最後の一息まで、父なる御神に私達人間を執り成してくださいました。モーセは神と民の間で板挟みとなり、神を神とできずに罪を犯したことがあります。が、主イエス・キリストは、罪を全く犯さず最後まで神を神として生き抜きました。このお方が、十字架の死から三日目に甦られた事で、モーセのように特別な人間ではない私達にも、神と親しく交わる道が拓けたのです。私たちが、主イエス・キリストのあとに従って、神と自分と人を愛せるようになるため、主イエスの十字架と復活はあるのです。

話は変わりますが、この前、有名な保育士のティ先生という方がアップしているYouTube動画を見ていて、おもしろいことを知りました。幼稚園生くらいの子供が、友達に嫌なことをしているのを見つけると、周りの大人は、「自分が同じことをされたら、どう思うかな？」と問いかけます。そして、「嫌だ」という答えを期待して「自分がされて嫌な事は人にしてはダメだよ」と教える事が多いそうです。しかし、この「自分が同じことをされたら、どう思うかな？」という問いかけ、幼稚園生は何を言っているか理解できない、というのです。「自分が相手の立場に立った時、どう思うか」というのは、かなり高度な脳の働きが必要で、幼稚園生にはとても無理、小学校の中学年、高学年、中学生くらいまでにならないと、想像できないそうです。子

どもが「相手の立場に立つ」という事を学ぶには、日々の生活の中での様々な経験の積み重ねによって脳が発達することが必要なのだ、という話でした。この話を聞いて、人は愛することを周りの人々から学ぶのだな、と思わされました。ある聖職者が「人を憎むことにも無関心になる事にも訓練は要らない。人を愛する事には修練が必要だ」と言ったのは、真実だなあ、と思います。私達も勿論例外ではありません。どうして私達が礼拝で繰り返し繰り返しイエス・キリストの十字架と復活の出来事を聞くのか？それは、主イエスの十字架と復活にこそ、こよなき愛が現れているからなのです。先ほど、共に賛美した「馬槽の中に」という讚美歌に「この人にこそこよなき愛は現れたり」とある通りです。自分を殺す者にさえも、こよなき愛を向け神にとりなした主イエス・キリスト。この方のもとにぞ愛がある、この愛が私達を真実に生かす。

だから、私たちは、誰でもありません、この主イエス・キリストのもとでこそ、こよなき愛を学び続けることができるのです。主イエス・キリストの愛に学び続ける者、それが主イエス・キリストの弟子です。弟子に終わりの日はありません。主の愛に学びつつ、神と自分と隣人を愛することを目指して生きる。そうして私達は、神の愛へと解き放たれ、自由にされます。それが、十字架と復活の主イエスを我が主、我が神と告白し、このお方に従って生きたい、と願う者には誰でも与えられる救いです。ファラオ達のように自己中心的に生きるしかない者が、主イエスの弟子とされ、自由に愛することを学び、神の子の自由に解き放たれる、そうして、神はわたし達を救いのご計画へと用いられます。何度失敗してもやり直させてもらえます。モーセがそうであったように。神はそのような主イエスの弟子である私達を「きわめて善い」と喜んでくださいます。神の喜びがあふれる所に主の弟子としての幸いがあります。神の喜びあふれる弟子として歩めますように祈ります。